王羲之と五石散

【キーワード】王羲之・東晋・五石散・服食養生

佐藤利行

一

中国の著名な文学者魯迅（一八八一～一九三六）が、一九二七年九月に広州における夏期学術講演会で行った「魏晋風度及文章与薬及酒之関係」と題する講演の中に「五石散」の服用のことが述べられている。[1]

此外、他也喜歓談名理。他身子不好、因此不能不服薬。他吃的不是尋常的薬、是一種名叫〈五石散〉的薬。

〈五石散〉是一種毒薬、是何晏吃開頭的。漢時、大家還不敢吃、何晏或者将薬方略加改変、便吃開頭了。五石散的基本、大概是五様薬。石鍾乳・石硫黄・白石英・紫石英・赤石脂、另外怕還配点別様的薬。但現在也不必細細研究它、我想各位都是不想吃它的。

従書上看来、這種薬是很好的、人吃了能転弱為強。因此之故、何晏有銭、他吃起来了。大家也跟着吃。那時五石散的流毒就同清末的鴉片的流毒差不多、吃薬与否以分闊気与否的。現在由隋巣元方做的『諸病源候論』的里面可以看到一些。拠此書、可知吃這薬是非常麻煩的、窮人不能吃、仮使吃了之后、一不小心、就会毒死。先吃下去的時候、倒不怎様的、后来薬的効験既顕、名曰〈散発〉。倘若没有〈散発〉、就有弊而無利。因此吃了之后不能休息、非走路不可、因走路才能〈散発〉、所以走路名曰〈行散〉。比方我們看六朝人的詩、有云「至城東行散」、就是此意。后来做詩的人不知其故、以為〈行散〉即歩行之意、所以不服薬也以〈行散〉二字入詩、這是很笑話的。

走了之后、全身発熱、発熱之后又発冷。普通発冷宜多穿衣、吃熱的東西。但吃薬后的発冷剛剛要相反、衣少冷食、以冷水澆身。倘穿衣多而食熱物、那就非死不可。因此五石散一名寒食散。只有一様不必冷吃的、就是酒。

吃了散之后、衣服要脱掉、用冷水澆身。吃冷東西、飲熱酒。

這様看起来、五石散吃的人多、穿厚衣的人就少。比方在広東提倡、一年后、穿西装的人就没有了。因為皮肉発焼之故、不能穿窄衣。為豫防皮肰被衣服擦傷、就非穿寛大的衣服不可。現在有許多人以為晋人軽裘緩帯、寛衣、在当時是人們高逸的表現、其実不知他們是吃薬的縁故。一班名人都吃薬、穿的衣都寛大、于是不吃薬的也跟着名人、把衣服寛大起来了！

還有、吃薬之后、因皮肰易于磨破、穿鞋也不方便、故不穿鞋袜而穿屐。所以我們看晋人的画像或那時的文章、見他衣服寛大、不鞋而屐、以為他一定是很舒服、很飄逸的了、其実他心里都是很苦的。

このほか、彼はまた好んで名理を語りました。彼は身体が弱かった。だから薬を飲まぬわけにはいかなかったのです。彼が飲んだのはありきたりの薬ではない。「五石散」という名の薬です。

「五石散」は一種の毒薬で、何晏がまず最初に飲みはじめたのです。漢の時代、人々はまだ飲もうとしなかった。何晏は処方をいくらか改良して、それから飲みはじめたのかもしれない。五石散の基本は石鍾乳、石硫黄、白石英、紫石英、赤石脂、たぶんこの五つの薬です。ほかにも少し別の薬を調合したかもしれません。だが、いまそれを細かに研究する必要はない。皆さんはそれを飲みたくはないでしょう。

書物で読むかぎり、この薬はすばらしいものです。それを飲めば

二

弱い身体を強くすることができました。ですから、金持ちだった何晏が飲みはじめる。人々もそれにつづいて飲んだ。当時、五石散が流した害毒は清末に阿片が流した害毒と同じくらいでした。薬を飲んでいるかどうかで羽振りのよさが決められたのです。いまでは、隋の巣元方が書いた『諸病源候論』にいくらか見つけることができます。同書によると、この薬を飲むのは非常に面倒だったことがわかる。貧乏人は飲むことができません。飲んだあとに、ちょっと注意を怠ると中毒死します。まず飲むときはなんでもない、つぎに薬が効目をあらわすことを「散発」と言います。もしも「散発」しなければ、害だけで効目はありません。それで、飲んだあとは休息してはいけない、歩かなければなりません。歩くから「散発」できるのです。だから、歩くことを「行散」と言いました。たとえば六朝の人の詩に、「城東へいたりて行散す」というのがある、つまりこれです。のちの詩人は、そのいわれも知らずに、「行散」を歩くことだと勘違いしました。だから薬を服用してもいないのに、「行散」という言葉を詩にとり入れました。これはたいへんおかしなことです。

歩くと身体中が熱くなる、熱くなってから、こんどは寒くなります。ふつうなら、寒くなればもっと重ね着をするか熱いものを食べればいい。だが薬を飲んだあとに寒くなると、まるで逆にしなければならない。薄着をして、冷たいものを食べ、冷水をかぶるのです。もしも厚着をして、熱いものを食べたら、まちがいなく死にます。

だから、五石散は一名寒食散ともいう。ただ一つだけ冷たいまま飲まなくていいのは、酒です。

五石散を飲んだあとは、服は脱ぎすてなければならない。冷水を身体にかぶる、冷たいものを食べる、熱い酒を飲む。だとすれば、五石散を飲む人がふえれば、厚着をする人がへる。たとえば広東で五石散をはやらせたら、一年後には、背広を着る人がいなくなる。肌が熱くなって、身体にぴったりした服を着ることができないからです。服に擦れて皮膚を傷つけないためには、どうしてもゆったりした服を着なければなりません。晋の人が薄い皮ごろもに緩い帯、ゆったりとした服を着ていたのは、当時としては高逸のあらわれだったと、いまは多くの人が思っている。彼らは、それが薬を飲んだせいだったのを知らないのです。有名な人たちがみんな薬を飲んで、だぶだぶの服を着る。そこで薬を飲まぬ人たちも有名人にならって、服をだぶだぶにしはじめたのでした！

まだある。薬を飲むと皮膚がすりむけやすく、靴もはきにくくなる。それで靴と靴下をやめて、木屐(ぼくげき)をはいた。ですから晋代の人の画像や当時の文章を見て、その人の衣服がだぶだぶだったり、靴のかわりに木屐をはいたりすると、我々はその人がたいへん心地よく、飄逸(ひょういつ)だったにちがいないと考える。ところがその人はつらい思いをしていたわけです。(2)

「五石散」という薬は、このようにたいへん厄介なものであり、また高価なものであったようであるが、実はこの「五石散」を東晋の王羲之も服用していた。以下小論では、王羲之と五石散との関わりについて、主として羲之の書簡を通して見てみようと思う。

二

羲之が「五石散」を服用していたということは、次の資料(3)によって知ることができる。すなわち、

服足下五色石膏散、身軽、行動如飛也。足下更与下七、致之不。治多少、尋面言之。委曲之事、実亦□人。尋過江言散。

（「百二」巻二）

足下の五色石膏散を服するに、身は軽くして、行動は飛ぶが如きなり。足下は更に七を与下(あた)へて、之を致すや不(いな)や。治の多少は、尋(つ)いで面して之を言はん。委曲の事、実(まこと)に亦た人を□。尋いで江を過ぐれば言散せん。

「あなたからいただいた五色石膏散を服用したところ、体は軽くなり、行動はまるで空を飛んでいるかのようです。あなたはさらに七服分を分けて下さり、お送りいただけますか。治癒の状況については、またお目にかかってお話しいたしましょう。詳しい事は、また人を(やります)。そのうちに(彼が)江を渡れば気晴らしをしましょう。」という内容の手紙である。

実は、羲之の書簡は数多くのものが今日まで残されている。[4] 書聖と呼ばれる羲之は、生前からその書が高く評価されていた。『晋書』王羲之伝には、次のような逸話が残されている。

嘘詣門生家、見棐几滑浄、因書之、真草相半。後為其父誤刮去之、門生驚懊者累日。

嘗て門生の家に詣り、棐の几の滑浄なるを見、因りて之に書し、真草相半ばす。後、其の父の為に誤りて之を刮り去られ、門生の驚懊する者累日なり。

「かつて門人の家に行き、棐の木の机のなめらかなのを見て、それに字を書いたが、真書と草書とが相半ばしていた。後にその父が誤って削り去ってしまった。門人は何日もふさぎこんでいた。」せっかくの羲之の書であったのに、門人の落胆振りが想像できる話である。

又嘗在蕺山、見一老姥、持六角竹扇売之。羲之書其扇、各為五字。姥初有慍色。因謂姥曰、「但言、是王右軍書。以求百銭邪」。姥如其言、人競買之。他日、姥又持扇来。羲之笑而不答。其書為世所重、皆此類也。

又た嘗て蕺山に在りて、一老姥の、六角の竹扇を持ちて之を売るを見る。羲之は其の扇に書して、各おの五字を為す。姥は初め慍る色有り。因りて姥に謂ひて曰く、「但だ言へ、是れ王右軍の書と。以て百銭を求めんか」と。姥 其の言の如くするに、人競ひて之を買ふ。他日、姥は又た扇を持ちて来たる。羲之 笑ひて答へず。其の書の、世に重んずる所と為ること、皆な此の類なり。

「またある時、蕺山で一人の老婆が、六角の竹扇を売っていた。羲之はその扇に五文字ずつ書いてやった。老婆は初め機嫌が悪かった。そこで羲之は、『ただ、これは王右軍の書だ、と言えば、百銭で売れよう』と言った。老婆がその通りにすると、人々は競って買い求めた。何日かして、老婆がまた扇を持って来たが、羲之は笑って答えなかった。その書が世に重んじられていたことは、みなこのようであった。」

更に『晋書』本伝には、これは羲之が鵞鳥を愛好していたというエピソードを伝えるものであるが、次のような記述も見える。

又山陰有一道士、養好鵞。羲之往観焉、意甚悦、固求市之。道士云、「為写道徳経、当挙群相贈耳」。羲之欣然写畢、籠鵞而帰、甚以為楽。

又た山陰に一道士有り、好き鵞を養ふ。羲之 往きて焉を観、意甚だ悦び、固く之を市らんことを求む。道士云ふ、「為に道徳経を写さば、当に群を挙げて相贈るべきのみ」と。羲之は欣然として写し畢り、鵞を籠にして帰りて、甚だ以て楽しみと為す。

四

「また、山陰に或る道士が住んでいて、好い鵞鳥を飼っていた。羲之は出かけて行ってそれを見、たいそう気に入り、どうしても売って欲しいとたのんだ。すると道士は、『老子の〈道徳経〉を写してくださるなら、この鵞鳥を全て差し上げます』と言った。羲之は大喜びでそれを写しおえ、鵞鳥を籠に入れて帰って、大変それを楽しんだ。」ここで道士が、「『道徳経』を写してくれたら、鵞鳥を差し上げよう」と言ったというのは、やはり羲之の書がそれほどまでに高い評価を得ていたということになろう。

ところで、羲之の書簡の中には、次のような興味深い内容のものがある。

上方寛博多通、資生有十倍之。覚是所委息。乃有南眷情。足下謂何以。密示。一勿宣此意。為与卿共思之。省已、以付火。

（「右軍」三一三）

上方は寛博にして通ずること多く、資生之に十倍する有り。是れ委息する所なるを覚ゆ。乃ち南眷の情有り。足下、何を以てせんと謂ふや。密かに示す。一に此の意を宣ぶること勿かれ。卿と共に之を思はんとするが為なり。省已はれば、以て火に付せよ。

「あちらは土地が広く、物資の流通も頻繁で、利益はここの十倍もあります。ここが落ち着き場所ではないかと思います。そのため南の方へ移ろうとする気持ちがあります。あなたはどう思われますか。こっそりお話ししているのですから、決して口外なさらないように。あなたと二人だけで相談したいと思うからです。ご覧になったら、燃やして下さい。」手紙の終わりに「省已はれば、以て火に付せよ」とあるように、この手紙の内容は他人に知られては困るものである。当時の名門王家の家長として、羲之は人知れず王家の運営に心を砕いていたのであろう。家長としての羲之の一面を知ることのできる資料としても興味深い。

ただ、この手紙が今日まで残っているというのは、この手紙を受け取った人が「火に付す」ることなく、取っておいたからに他ならない。先にも述べたように、羲之の書は当時から高い評価を得ていた。その羲之からのせっかくの書簡を、そう簡単に棄てることができないというのは当然のことであろう。今日我々が、著名な人からの賀状や時候の挨拶の葉書などを大切にとっておくことと同じである。しかし、羲之の書の評価が高かったということで、逆に多くの羲之の書簡が今日まで残されることになったのである。

三

さて、前段でも述べたように、当時の羲之は王家の家長として、また一人の政治家として、日々の生活の中では、相当な圧力があったと想像される。そのことを窺わせる書簡の中から、会稽内史の時期のものについて見てみよう。

行当是防民流逸。不以為利耶。此於郡、為由上守、郡更尋詳。若不由上命、而断中求絶者、此為以利。卿絶之是也。縦民所之、恐有如向者流散之患。可無善。詳其問。（「右軍」三七五）

行ゆく当に是れ民の流逸を防ぐべし。以て利と為さざるか。此れ郡に於いて、為すに上守に由らば、郡は更めて詳を尋ねん。若し上命に由らずして、中を断ちて絶つを求むれば、此れ以て利と為らん。卿の之を絶つは是なり。民の之く所を縦にせば、恐らくは向者の如き流散の患ひ有らん。善きこと無かる可し。其の問を詳かにせよ。

「そのうちに民の流亡を食い止めねばならなくなるでしょう。（その前に）あなたのためになるようにされないのですか。この事が郡において、上官の手に渡れば、郡の方から更めて詳しい様子を尋ねることになるでしょう。もし、上官の命令によらずに（民の流亡の）流れを断って食い止めたなら、それはあなたのためになるでしょう。あなたがそれを食い止めるのがいいのです。民の流亡を放っておけば、恐らくは以前のような流散の被害があるでしょう。よいことにはなりません。そちらの様子を詳しくお知らせ下さい。」此の手紙は羲之が会稽郡の内史であった時、郡内の県の長官に与えたものと思われる。郡からの指示が下る前に県で処置するように、という内示のようである。

次の書簡は、会稽郡一帯が飢饉になった時のものである。

六

此郡之弊、不謂頓至於此。諸逋滞、非復一条。独坐、不知何以為治。自非常才所済。（「淳化」八・「二王」上三）

此の郡の弊、謂はざりき、頓かに此に至らんとは。諸もろの逋滞は、復た一条のみに非ず。独り坐して、何を以て治を為すかを知らず。自ら常才の済ふ所に非ず。

「この郡の疲弊が、急にこのような（ひどい）状態になろうとは、思ってもみませんでした。諸々の税の未納や滞納は、少々のことではありません。一人じっと座ったまま、一体どのようにして治めたらよいものやら途方に暮れております。これは私ごとき並みの才能の者に救えるようなものではありません。」郡を治める者としての思いが見て取れる書簡である。恐らく同じ時期のものであろう。次のような内容のものもある。

知郡荒。吾前東、周旋五千里、所在皆爾。可歎。江東自有大頓勢。不知何方以救其弊。民事自欲歎。復為意卿、示聊及。（「右軍」一五四）

郡の荒を知る。吾は前に東し、周旋すること五千里、所在皆な爾り。歎く可し。江東も自ら大頓の勢ひ有り。何ぞ方に以て其の弊を救ふかを知らず。民事は自ら歎かんとす。復た卿を意ふが為に、示して聊か及ぶ。

「郡の荒廃していることを知りました。私は先日、東の方を五千里にわたって見て回りましたが、どこもかしこもすべて同じ状態でした。嘆かわしいことです。江東もひどくなりそうな気配です。一体どのようにしてこの疲弊を救えばよいのでしょうか。政治の状態は困ったことになりそうです。またあなたのことが思われて、筆をとった次第です。」

また、雨乞いに関する次のような書簡も残されている。

足下似董仲舒開閉陰陽法。可勅令料付。不雨憂之。深珍重。

（「右軍」四三四）

足下は董仲舒の開閉陰陽の法有るに似たり。勅して料付せしむ可し。雨ふらざれば之を憂ふ。深く珍重せよ。

「あなたには董仲舒の開閉陰陽の法を修めていらっしゃるようです。部下に命じて手配させましょう。雨が降らないので心配しております。ご自愛下さい。」『史記』巻一二一「董仲舒伝」に、「春秋災異の変を以て、陰陽の錯行する所以を推る。故に雨を求むるには、諸陽を閉ざし、諸陰を縦にす。其の雨を止むるには、是れに反す」とあり、またその著『春秋繁露』巻一六には「求雨」「止雨」の法についての記述が見えるように、董仲舒は雨を操ることの法を知る人であった。その法を修めている手紙の相手に対して、雨を降らすためのまじないの準備を部下にさせますから、というものである。

ここにその一部を挙げただけであるが、羲之には会稽内史としての責任と日々郡政に当たらねばならないという苦労があったように思われる。また、このような様々な圧力を感じざるを得ない日常の生活のなかで、羲之自身の体調も決して良いものではなかった。病気に関わる数多くの書簡がそれを物語っている。

五月十四日、羲之白。近反至也。得七日書、知足下故爾。耿耿。善将息。吾腫得此霖雨転劇。憂深。力不一一。羲之。

（「右軍」九五）

五月十四日、羲之白す。近ごろ反至るなり。七日の書を得て、足下の故より爾るを知る。耿耿たり。善く将息せよ。吾が腫は此の霖雨を得て転た劇し。憂ふること深し。力不一一。羲之。

「五月十四日、羲之白す。最近、帰って来ました。七日付のお手紙を頂き、あなたがやはり患っておられることを知り、心配しております。どうかお大事に。私の腫は、この長雨のせいで次第にひどくなりました。とても憂慮しております。早々。羲之。」ここの「腫」については、今は体がむくむことに解したが、或いは、はれものができたことをいうのであろうか。

吾頃胸中悪、不欲食。積日勿勿。五六日来、小差、尚甚虚劣。且風大動、挙体急痛、何耶。頼力及足下家信(5)、不能悉。王羲之。

吾は頃ろ胸中悪しく、食を欲せず。積日 勿勿たり。五六日来、小しく差ゆるも、尚ほ甚だ虚劣たり。且つ風の大いに動き、挙体 急に痛むは、何ぞや。頼力めて足下の家信に及ぶも、悉くす能はず。王羲之。

（「右軍」三三七）

「私はこのごろ胸のあたりが苦しく、食欲がありません。何日も調子がよくありませんでした。五・六日前から、少しはよくなりましたが、やはりすぐれません。その上、風邪がひどくなり、体じゅうが急に痛むのですが、どうしたのでしょうか。なんとかお宅の使者に手紙をことづけさせましたが、十分には意を尽くせませんでした。王羲之。」ここの「風」を今は風邪の意に解したが、あるいは中風など他の病気かもしれない。

四

そうした生活の中で、羲之は服食養生につとめることになる。服食養生に関わる書簡としては次のようなものが見られる。

得九日問。亦云、鄙平平。想得涼、転勝。以疾乃服法、必解此意。（「右軍」二七〇）

九日の問を得たり。亦た云ふ、鄙は平平たりと。想ふに涼を得ば、転た勝らん。疾には乃ち服法あるを以て、必ず此の意を解せよ。

「九日のお便りを受け取りました。鄙は相変わらずということですが、涼しくなれば、次第によくなることでしょう。病気には服法というものがあるのですから、その意味をよく理解するように。」ここの「鄙」とは、家族を呼ぶ言い方か、あるいは誰かの名前と想われる。ここで羲之は、「服法」すなわち薬の飲み方について注意を与えている。

旦極寒。得示、承夫人復小欬、不善得眠、助反側。想小爾復進何薬。念足下猶悚息。卿可否。吾昨暮復大吐。小嗽物、便爾。旦来可耳。知足下念。王羲之頓首。（「右軍」一七五）

旦は極めて寒し。示を得て、夫人の復た小しく欬し、眠りを得るに善からずして、反側するを助すことを承る。小爾か復た何の薬を進めんかを想ふ。念ふに足下は猶ほ悚息せん。卿は可なりや否や。吾は昨暮、復た大いに吐く。小しく物を嗽ひたれば、便ち爾り。旦来 可なるのみ。足下の念ふを知る。王羲之 頓首。

「明け方は殊に冷え込みます。お便りをいただいて、奥様がまた咳きこまれ、寝付かれずに、寝返りばかりをうっておられることを知りました。何かお薬を差し上げようと思います。あなたもさぞかしご心配なことでしょう。あなたはお変わりありませんか。私は昨晩ひどく吐きました。少し物を食べると、すぐにそうなるのです。今朝がたから、よくなりました。お心遣いありがとうございます。王

八

羲之 頓首。」この手紙によれば、羲之は相手の病状によって、薬の処方をしていたようである。

相手の病状を聞く内容のものには、次のような書簡もある。

山下多日、不得復意問。一昨晩還、未得遣書。得告、知中冷不解、更壮湿、甚耿耿。服何薬耶。僕比日差勝。尋知問。王羲之頓首。（「右軍」五四）

山下に日を多くし、復た問を意ふを得ず。一昨 晩く還り、未だ書を遣るを得ず。告を得て、中冷の解せず、更に壮湿なるを知り、甚だ耿耿たり。何の薬を服するや。僕は比日 差や勝る。尋いで知問せよ。王羲之 頓首。

「山のふもとに何日もおり、お手紙を差し上げることを忘れておりました。一昨日、遅く帰って来ましたので、まだ手紙を出しておりません。お便りをいただき、中冷がよくならないうちに、さらに壮湿であることを知り、とても心配しております。何の薬を服用しておられますか。私はこの頃、だいぶよくなりました。おりかえし様子を知らせて下さい。王羲之 頓首。」ここに見える「中冷」「壮湿」は、いずれも病気の名であろう。恐らく羲之は、相手の病状を聞いては、それに適切と思われる薬を処方していたものと思われる。

具体的な薬の服法などについてのものとしては、

噉豆、鼠傷如佳。今送。能噉不。（「淳化」三・「二王」上五五）

豆を噉へば、鼠傷に佳なるが如し。今、送る。能く噉ふや不や。

「豆を食べれば、鼠傷に効くようです。今、お送りします。食べられますか。」

鷹嘴爪、灰入麝香煎、酥酒一盞服之、治痔瘻有験。十七日、羲之頓首。（「二王」中三七）

鷹の嘴爪、灰にして麝香に入れて煎じ、酥酒一盞にて之を服すれば、痔瘻を治すに験有り。十七日、羲之 頓首。

「鷹の嘴と爪は、灰にして麝香に入れて煎じ、さかずき一杯の酥酒で服用すれば、痔瘻によく効きます。十七日、羲之 頓首。」などが有る。その他、羲之の書簡に見える薬の名は実に様々なものがあり、「天鼠膏」（「右軍」十一）「陟釐」（「右軍」一六〇）「桃膠」（「右軍」三一九）「狼毒」（「淳化」五）「石脾」「独活」（「二王」中三四）など、枚挙に遑がない。

五

さて、『世説新語』言語篇に、

何平叔云、服五石散、非唯治病、亦覚神明開朗。

何平叔云ふ、五石散を服すれば、唯に病を治するのみに非ず、亦た神明開朗なるを覚ゆ、と。

「何平叔が言うには、『五石散を服用すると、ただ病気が治るだけではなく、心が伸び伸びと朗らかになる』と。」とあり、またその注に引く秦丞相（承祖）「寒食散論」に、

寒食散之方、雖出漢代、而用之者寡、靡有伝焉。魏尚書何晏首獲神効、由是大行於世、服者相尋也。

寒食散の方、漢代に出づると雖も、之を用ふる者寡く、伝ふること有る靡し。魏の尚書何晏は首めて神効を獲、是れに由りて大いに世に行はれ、服する者 相ひ尋ぐなり。

「寒食散の処方は、漢代に始まったが、それを服用する者は少なく、処方を伝える者も無かった。魏の尚書であった何晏がはじめてそのすぐれた効き目を得て、それから世に流行するようになり、服用する者も相次いだ。」というように、魏の何晏より、魏晋の貴族の間で流行した「五石散」は、服食養生の中心であった。先に挙げた羲之の書簡にも「服足下五色石膏散、身軽、行動如飛也」（足下の五色石膏散を服するに、身は軽く、行動は飛ぶが如きなり）とあるように、王羲之も此の「五石散」の愛好者であった。

「五石散」とは、石鍾乳・石硫黄・白石英・紫石英・赤石脂の五種の薬石を調合したものであることは、はじめに挙げた魯迅の文章に言う通りであるが、これらの薬石の一種であろうか、「紫石散」というのも、王羲之の書簡には見えている。

二十九日、羲之報。月終、哀摧傷切。奈何奈何。得昨示、知弟下不断。昨紫石散、未佳。卿先羸甚。好消息。吾比日極不快。不得眠、食殊頓勿。令合陽、冀当佳。力不一一。王羲之報。

（「右軍」一九六）

二十九日、羲之 報ず。月は終らんとし、哀摧にして傷みは切なり。奈何せん 奈何せん。昨の示を得て、弟の下の断えざるを知る。昨の紫石散、未だ佳ならず。卿は先ごろ羸るること甚だし。好く消息せよ。吾は比日、極めて快ならず。眠るを得ず、食は殊に頓勿なり。陽を合せしめ、当に佳なるべきことを冀ふ。力不一一。王羲之 報ず。

「二十九日、羲之 報ず。月も終わろうとし、感慨深くなってしまいます。どうしたものでしょう。昨日のお便りで、あなたの下痢が治らないことを知りました。先日の紫石散も、まだ効かないようですね。あなたは先頃ひどく疲れておられたからです。どうかお大事に。私は近頃とても具合を悪くしており、よく眠れませんし、食もまったく進みません。陽に合わせるようにして、元気になることを願っております。早々。王羲之 報ず。」ここの「消息」とは、今は休息

十

し養生することと解したが、或いは様子をお知らせ下さい、の意かも知れない。「合陽」とは、陰の気を避け、陽の気に合わせるようにすることを言うものと思われる。

ところで、はじめに挙げた羲之の書簡の中に、「尋過江言散」（尋いで江を過ぐれば言散せん）とあったが、ここにある「言散」の語は、魯迅の文章に見える「行散」と関わりのある言葉であろうか。この他にも、以下に挙げる書簡に「言散」の語が見える。

追尋傷悼、但有痛心。当奈何奈何。得告慰之。吾昨頻哀感、便欲不自勝挙。旦服散行之、益頓乏。推理皆如足下所誨。然吾老矣。餘願未尽、唯在子輩耳。一旦哭之。垂尽之年、転無復理。此当何益。冀小却漸消散耳。省卿書、但有酸塞。足下念故言散、所豁多也。王羲之頓首。（「右軍」一九三・「淳化」三）

追尋しては傷悼し、但だ痛心有るのみ。当た奈何せん　奈何せん。告を得て之を慰む。吾は昨　頻りに哀感し、便ち自ら勝挙へざらんとす。旦に服散して之を行ふも、益ます頓乏す。理を推すに皆な足下の誨ふる所の如し。然れども吾は老いたり。餘願の未だ尽くさざるは、唯だ子輩に在るのみ。一旦　之を哭す。垂尽の年、転た復する理無からんとす。此れ当た何の益あらん。小却か漸く消散せんことを冀ふのみ。卿の書を省るに、但だ酸塞有るのみ。足下　言散して、豁くする所の多からんことを念故せよ。王羲之頓首。

「思い起こしては悲しみ、ただ心が痛むばかりです。いったいどうすればいいのか。お手紙をいただいて心が慰みました。私は昨日、悲しくてたまらなくなり、とても我慢することなどできませんでした。朝になって服散したのですが、ますます元気がなくなってしまいました。そのわけを考えてみますに、すべてあなたのお考えの通りです。ところで私は年老いてしまいました。心に残っていることは、ただ子供たちのことだけです。ところが、にわかにその死を哭することになろうとは。残りわずかな年齢になり、とても病気が治る望みもありません。服薬していったい何の益があるかと思います。しかし、少しずつでも薬を飲んで治したいと願っているわけです。あなたのお手紙を見ては、ただ悲しみに胸がふさがるばかりです。あなたは気を晴らして大きな気持ちでいるようにして下さい。王羲之　頓首。」同じく「言散」の語が見える書簡がもう一例有る。

晩復毒熱。想足下所苦、並以佳、猶耿耿。吾至頓劣。冀涼言散。力知問。王羲之頓首。（「淳化」四・「二王」上二一）

晩に復た毒熱あり。想ふに足下の苦しむ所、並びに以て佳ならんも、猶ほ耿耿たり。吾は至つて頓劣なり。冀はくは涼となり言散せんことを。力知問。王羲之　頓首。

「夜になってまたひどい暑さです。あなたのご病気も、よくなられたとは思いますが、やはり気がかりです。私はとても弱っておりま

す。涼しくなって気晴らしをすることを願っております。お便り下さい。王羲之 頓首。」

六

以上、この度は王羲之の書簡を中心として魏晋の貴族の間で流行したといわれる「五石散」の服用と羲之との関わりについて考察した。それによって一般に我々が抱いている書聖としての王羲之のイメージとは、また異なる彼の側面を見たような気がする。名門王家の家長として一族を率いていかなくてはならない責任、また役人としての立場、そういった重圧の中で羲之みずからは体調の不安も抱え、服食養生につとめることになる。そのため、羲之は「五石散」をも服用していたのである。

しかし、今回は触れることができなかったが、こうした服食養生に励む一方で、身近な者の死や、身内の者の死、わけても自分よりも年の若い者たちの死に直面して、羲之は「死」というものを真剣に見つめ直すことになるのである。そうして今この時を大切に生きようという思い、すなわち「目前の娯しみ」を尽くすことに、その問題への答を見いだそうとした。このことについては、また稿を更めて述べてみたい。

〔注〕

（1）『魯迅全集』（人民文学出版社）「而已集」所収。

（2）訳文は松井博光（代表）他訳『魯迅全集』5（学習研究社）に拠った。

（3）テキストは、唐・張彦遠輯『右軍書記』（「法書要録」所収）、清・乾隆三十四年勅集『欽定重刻淳化閣帖』（「武英殿聚珍版書」所収）、宋・許開撰『二王帖評釈』（「横山草堂叢書」所収）、明・張溥撰『漢魏六朝一百三家集』を用い、『全晋文』を参考した。

（4）森野繁夫・佐藤利行『王羲之全書翰』（増補改訂版）白帝社には全六九五条の書簡を収めている。

（5）「信」とは、当時、手紙を運ぶ使者のことで、羲之の書簡に多く見られる。「信使」という語も見え、ここの「家信」とは、あなたの家の手紙を運ぶ使者、という意。

王羲之和五石散

佐　藤　利　行

五石散是魏晉時代流行於貴族之間的一種毒藥。《世說新語》言語篇中有這樣的記載：“何平叔云，服五石散，非唯治病，亦覺神明開朗。”劉孝標注引秦丞相（按當作秦承祖）《寒食散論》說，“寒食散之方，雖出漢代，而用之者寡，靡有傳焉。魏尚書何晏首獲神效，由是大行於世，服者相尋”。由此可知，當時以何晏爲首，五石散作爲服食養生的藥物盛行於魏晉貴族之間。

東晉的王羲之也曾服用過五石散，關於這一點我們可以從他留下的信箋中找到證據。例如在他的信中就提到過“服足下五色石膏散，身輕，行動如飛也”等內容。

此次，小論主要以王羲之的信箋爲資料，來探討王羲之和五石散的關係。